

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 4 1 号

2022 年 5 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 1 の手紙講解説教」より (1 1)

預言と異言

[パウロは、コリント前書第 14 章で] 信者のためにも、未信者のためにも、「預言」は「異言」よりも優っていることを述べました。「異言」というものは、…現代のわれわれにとって最も解しがたい言葉であります。聖霊に導かれ、我を忘れる状態になって、神に対して語る状態であります。これに対してパウロは、「預言」というものは、将来起こるべき事を預言するという意味ではなく、神の福音の真理を人々に解き明かすものであると言っております。パウロは、福音を解き明かすこと、即ち、説教を非常に重視しております。ロマ書 10 章には、「信仰は聞く事から生ずる。聞くことは神の言葉による」と書かれています。「聞く」とは、説教を聞くことでもありますから、信仰の出て来る根源がここに在ります。これに比べれば、「異言」は低い。特に、信者に対しては「異言」は預言に劣ると言っています。

「預言」の方を求めよ

当時のコリント教会のある人々は、パウロが使徒であることを否定しておりました。我々は聖霊に導かれて「預言」をするのであるから、パウロの指揮を仰ぐ必要はないという意見があったようであります。従って、パウロは、自分に反対する人々を予想しておりました。もし、あなたがたが本当の預言者であるならば、私の預言が分かる筈であるという。もし、あなた方がこれに耳を貸さないのであれば仕方がない。その人の無知の責めを自分がうけたらよかろうと言いました。14章39節には、「私の兄弟たちよ。このようなわけだから、預言することを熱心に求めなさい。」と。ここでも「兄弟達よ」とあります。パウロは、神の愛を受けていた人ですから、何時も、どんな人々に対しても、イエス・キリストの福音を伝えたいという愛があったようであります。「異言」もよろしい。しかし、「預言」の方を求めよと、はがゆい位に、何度も繰り返し語っております。私はこのパウロの態度はすごいと思います。私共であつたら「このようにやれ」と言いたくなりますが、パウロのやり方は違います。どこまでも相手の態度を許して、それに同情して、そして「それよりもこれの方が良い、だからこちらの方へ譲れ」と言っているのであります。これが、彼自身の態度であります。パウロは、自分は使徒であるという確信を持っておりますから、このような態度になれます。

アガペー

結論として、パウロは「異言」というものは教会の徳を立てず、未信者にもよろしくないのだから、「預言」に譲れというのです。実に、人を教えるのに、誠に学ぶべき所多い場所であります。私の娘もよく私のいうことを聞きません。そんな時は何時も、息子が間に入って説明すると分かってくれるようです。一般に、自分の弱点を指摘されると、人は必ず反抗します。正しいことに反発する。これが人間の罪人である良い証拠だと思います。パウロは、これほど、忍耐をもって懇々と説明しましたが、それでもコリントの人々は理解できなかつたようです。しかし私は、ある人々はこれによって救われたであろうと信じています。これはパウロの教育的手段ではなく、パウロの愛「アガペー」から来ています。我々が、本当に「アガペー」が分かり、本当に永遠不滅の生命を体得する時に、我々はこういう態度になって来るのでしょ。…第2に学ぶ点は、我々の信仰というものが、「異言的になっていないか」即ち、独りよがりになっていないかということです。十分注意する必要があります。第3番目には、パウロのような立派な先生でも、コリント教会、しかもパウロの創立した教会においてすら、パウロに対して反対があったということでもあります。これは大いなる教訓であります。第4番目に、私は、神からの賜物の値打ちをよく知り、それを用いる方法を知ることが重要であると思います。これは「アガペー」、神からの愛であります。賜物

を人のために用いるには、愛がなければだめです。かえってマイナスになるかも知れません。自分に能力があると思って振り回しておりますが、かえってマイナスになっていることを知るべきです。我々は、第14章の1節「愛を追い求めなさい」の愛「アガペー」を自分のものとしなければ始まらない。この「愛」は、親子、兄弟の愛、友人の愛、値打ちのあるものを愛する愛とは違います。神が与えたまう、イエス・キリストの十字架の贖いから来る愛であります。本章をよくよく熟読するときにパウロのアガペーが我々に迫るのを感じます。

有名なパウロの復活論

コリント前書 15 章は、有名なパウロの復活論であり、また、これは復活に関する最初の記事でもあります。「復活」がキリスト教の根底をなしているために、この箇所が実に重きを成しています。旧約、新約聖書全 66 巻を通して、「復活」を論じている場所はこの場所だけあります。如何に重要であるかということは言葉を要しないところでもあります。もし、この 15 章がなければ、ヨハネが言う永遠の生命の内容も空漠なものとなります。実に、パウロのキリスト教に貢献している点で、このコリント前書の右に出るものは有りません。パウロは、この 15 章の前半で「イエスの復活」の事実を述べ、後半では、その復活の性質並びにその態様などの困難な問題について説明しています。そして最後に、この「死を征服する復活」によって、日々の生活を新にせよ、確立せよ、ということをお勧めしております。実にロマ書 8 章とともに、聖書中の聖書とも言うべき場所でもあります。

ペテロ、弟子に現れたこと

わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてある通り、私達の罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてある通り、3日目によみがえったこと、ケパに現れ、次に12人に現れたことである。(コリント I 15・3-5)

これがパウロの最も重大なこととして述べた福音の内容であります。イエスが我々の罪のために十字架上で死んだこと、埋葬されたが3日目に復活してペテロ及び弟子共に現れたこと、今日の教会においては誠に軽視されておりますけれども、これがパウロの説く福音であります。ここでパウロは、この十字架にかかったこと、イエスが復活したことについて、人間の道理や理性に適ってと言わず、聖書に適って起きた事実として、根拠を聖書に置いております。この根拠はイザヤ書53章、詩篇16篇、ヨナ書、ホセヤ書6章に出ております。ケパ、即ちペテロに現れ、12人に現れたとありますが、復活したイエスが弟子に現れたことは、聖書の12か所に書いてあります。パウロは、5節以下で、6つの例を挙げています。他の新約聖書ではマグダラのマリヤに現れたとありますが、パウロはまず、常識のある漁師であった使徒ペテロに現れたと言っております。次に12人とありますが、ユダが死んでおりますので、11人でしょう。6つのうち3つは個人に、他の3つは団体に現れて

います。新約聖書では、いつケパに現れたのかについては沈黙しています。また、どういう言葉でイエスがケパに言われたのかについても不明です。注釈者は聖なる沈黙と言っています。ペテロや弟子共は逃げ回っておりまして。また、イエスと同じく、十字架にかけられるのではないかと戦々恐々としていた弟子たちは、このイエスの復活に会いまして、新しき人となったごとく、イエスの復活は、彼らの復活を意味することを知りまして、自分の罪が許され、永遠の生命が与えられて、自分もイエスと同様に復活する者となるという確信に立ちました。逃げ回っていた彼らは敢然として方向転換して、彼らを責める連中に対して、大担不敵に「君等がイエスを十字架につけたのではないか。罪を改めて福音を信ぜよ」と伝道を開始しました。これは、イエスの復活が彼らに現れた後のことでもあります。これがキリスト教の根底となりました。

ヤコブに現れたこと

そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば月足らずに生まれたようなわたしにも現れたのである、実際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であって、使徒と呼ばれる値うちのないものである。(コリント I 15・7-9)

イエスの兄弟の一人であるヤコブに現れたということは驚くべきことでもあります。家族はイエスを信じておりませんでした。イエスを間違いであると思っていました。然るに、家族の一人であるヤコブがイエスの復活に接して使徒となり、エルサレム教団の中心人物となったということは、実に不可思議なことでもあります。次に現れたすべての使徒たちの中には、疑い深いトマスがおりました。彼は復活のイエスに接して「わが主よ、わが神よ」と叫んだという有名な記事がありますが、これは、我々疑い深い人間が最後に告白すべき言葉であります。最後に自分に現れたとあります。内村先生は、月足らずとは、現在のやくざ者という意味であったろうと言われました。教会を迫害したパウロは、当時のやくざ者でした。これは前記した5つの場合と比べ、より大きな事件であります。この事件に着いては、新約聖書はペテロの場合のように沈黙を守らずに、使徒行伝において明らかに、どのようにしてパウロがイエスと接したかが書かれております

パウロに現れたこと

パウロは、自分は恵によって今日があるという。「神の恵み」とは、パウロの一枚看板であり、最も好きな言葉であります。この言葉は、コリント前書では、3回しか出て来ません。その3回ともが、この15章10節に出て来ます。キリスト教は、一言で言えば、実にこの「神の恵み」です。その内容は、イエス・キリストが十字架について、我々の罪を贖い、そして復活したということです。これが「神のアガペー」であります。これによって現在の自分があるとパウロは言いました。その恵みを自分は無駄にしなかった。そして、自分は主イエス・キリストの復活の証人であると言う。実に、このパウロの証言は有力なるものであります。この月足らずの迫害者をして誰よりも多く働かせた。正にこれは、復活の主が彼に現れたことによっています。また、最後に、パウロは、復活に接した使徒とともに、今同じ福音を述べているのであったと言いました。…

キリスト教は何を信ずるか、ということに尽きます。その客体は、第1にイエス・キリスト我がために十字架について死んでくれたこと、第2に、復活されたことであります。換言すれば、我々は、罪赦されて永遠の生命を頂いたということです。我らまた、復活する者となる。

内村鑑三先生の注解

「復活の信仰に関して、我と他の人達との間に何の差別はない。汝等との間にも、また何の差別あるなし。初代のキリスト教会は、実にそうであった。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ等、皆「復活」を唱え、コリント、エペソ、アンテオケ等の信者みなこれを信じた。しかして彼等は、この信仰において一致したるがゆえに、世界のかつてみたる最大強国たるローマ帝国にあたりて、よくこれに打ち勝つことを得たのである。今日の教会はいかん。我等は果たしてパウロの如くに言い得るか。組合教会にもあれ、メソジスト教会にもあれ、長老教会にもあれ、その教師等、皆キリストの肉体復活を宣べ伝えていると言いうるか。また、米国にもあれ、ドイツにもあれ、日本にもあれ、他の信者等、皆この信仰において一致すると言い得るか。もし、しか言い得るならば、今日の如き諸々の教会なるものあるべき筈なし。直ちに、一団とならざるを得ないのである。教会の微弱を嘆ずるを止めよ、キリスト、我らの罪のために死し、また、葬られて、3日目によみがえりたることを堅く信ぜば、教会はたちまち活気を横溢するであろう。パウロの伝道は、最も長きところにおいて3年、短きは2週間、また、数日をでざりしに、至る所において強固なる教会の成立を見たるは何が故であろうか。彼らは単刀直入、事実を提唱したるが故である。弟子等の目撃したるキリスト復活の事実を口証したる故である。」

以上が内村先生の注解であります。たとえすべての人がイエスの復活を疑い、信じなくとも、私は、この聖書の文に従って、内村先生と唯二人で信じて天国へ行く決心であります。